



善導寺境内遺跡

第1・2次調査概要報告書

久留米市文化財調査報告書 第246集



2007. 03

久留米市教育委員会

序

久留米市には、筑後川や耳納山地がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けて暮らしてきた先人達が積み重ね、創造してきた生活・文化遺産が数多く存在しています。

本書で報告する善導寺境内遺跡は、創建以来800有余年と市内有数の歴史を誇る古刹、浄土宗大本山善導寺に所在する重要文化財大庫裏他6棟の建造物保存修理事業に伴い発掘調査を行ったもので、第1次調査は寺内の建造物の大半が焼失した延享5年(1748)の火災の後、寛延2年(1749)に竣工した大庫裏の地下遺構の調査、第2次調査は明治5年に他の寺へ売却された役寮、及び対面所の移築復元を目的とした基礎工法の調査を行っています。

本書はその発掘調査成果の概要を収録していますが、本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、生涯学習や学術研究の資料として活用されますことを願うと共に、今回の調査に対し、御理解・御協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月20日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集充

例 言

1. 本書は、久留米市善導寺町飯田所在の善導寺境内遺跡第1・2次調査の概要報告書である。
2. 調査は、重要文化財の善導寺大庫裏他6棟保存修理事業に伴い、宗教法人善導寺代表役員阿川文正と久留米市長江藤守國との契約に基づき、受託事業として実施したもので、発掘調査から報告書作成に至る費用は、宗教法人善導寺が負担した。
3. 発掘調査は、久留米市文化観光部文化財保護課の水原道範が担当した。現地調査は第1次調査を平成17年6月13日より同年10月17日まで、第2次調査を平成18年1月17日から同年2月23日の期間で実施した。整理作業は平成17年7月1日～同年7月31日まで実施した。
4. 本書に掲載した遺構の実測図は水原の他、神保公久・楳原初美・田中樹子・藤木幸子・丸山幸・渡辺しげ子・渡辺やつ子・小西富美子・緒方智恵子・芹田治代・後藤洋子・大熊澄子・大塚ヒロ子・山田広幸が作成し、図面の浄書、写真撮影は水原が行った。
5. 本書の遺構実測図は日本測地系第Ⅱ座標系(旧座標系)を基に作成し、図面の方は全て座標北を示す。
6. 本書中の遺構略記号は、S D……溝、S K……土坑、S E……井戸、S B……掘立柱建物、S X……その他の遺構を示す。
7. 善導寺境内遺跡の略記号はZ N K、調査番号は、第1次調査が200509、第2次調査が200531である。
8. 本文中に記した6桁の数字は、本市文化財保護課における遺物登録番号で、調査番号を省略して表記している。
9. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本書の執筆・編集は水原が行った。

本 文 目 次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 第1次調査	4
IV. 第2次調査	18

I. はじめに

1. 調査に至る経過

浄土宗大本山普導寺は、承元2年（1208）の開創と伝えられ約800年の歴史を有する寺院である。現在の普導寺境内は、延享5年（1748）の寺域の大部分が火災によって焼失した後、その翌年から明和元年（1764）までの間に再建された本堂・大庫裏・釜屋・広間・書院・役寮及び対面所の建物群を中心に寺域が構成されているが、上記の建物のうち、先に修理を行った本堂を除く建物群は約250年の歳月を経て老朽化が進行し、平成15年から同24年までの計画で、文化財建造物保存修理事業が進行している。

普導寺境内遺跡の調査は、その保存修理事業に伴う発掘調査である。第1次調査は大庫裏の礎石が著しく不同沈下を起していたことから、その基礎を約70cm掘り下げ全面コンクリート盤とする基礎工法が採用されたことにより、その削平部分を対象として平成17年6月13日～同年10月17日まで実施した。

第2次調査は第1次調査地の北西に隣接する中蔵部分を対象とした調査である。ここは延享火災の後、寛延4年（1751）に上棟した役寮及び対面所建物が建てられ、その後安政6年にはその東側が一部建て替えられていたが、明治維新によって寺領を失い、経営が悪化した普導寺は明治5年にこの建物を売却した。中蔵はその跡地に移築されたものである。ところが今回の保存修理を契機とした古文書等調査の結果、市内北野町の専称寺に売却された建物が現存し、庫裏として使用されていることが判明した。結果、その建物を専称寺から買い戻して移築復元する運びとなり、中蔵とそれに先行する役寮及び対面所建物の基礎工法調査として、平成18年1月17日～同年2月23日の期間に調査を実施した。

2. 調査の体制

本調査に係る組織体制は以下のとおりである。

調査委託：宗教法人普導寺	代表役員	阿川 文正
調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長	石川 集充
調査総括：久留米市文化観光部	部 長	緒方 眞一
文化財保護課	課 長	関 知彦
	課長補佐兼課主査	立石 雅文
	事務主査	松村 一良 大石 昇 近澤 康治
	調査庶務	権藤 節子
	調査担当	水原 道範

発掘調査臨時職員

井上登志男・原田幹雄・田中鹿雄・宮崎文利・満上国男・堀田秀美・小西富美子・田中樹子
植原初美・藤木幸子・渡辺しげ子・丸山幸・石井紀美子・芳野ヒサコ・原良子・緒方智恵子
芹田治代・大熊澄子・上野ヒデ子・人塚ヒロ子・田中トシ子・石井弘子・熊谷秋子・江藤敏
吉弘エミ子・後藤洋子・山田広幸・塚本恵子・田中裕子・小野和子・城幸子

出土遺物整理臨時職員

古田麻矢

Ⅱ. 遺跡の位置と環境

本遺跡は久留米市東部の善導寺町飯田550番地に所在する。ここは筑後川左岸に形成された標高12m前後を測る微高地の北端部に位置するが、遺跡のすぐ北東側には筑後川が享保10年と昭和7年に着工した捷水路工事によって直流化するまで旧河道が大きく蛇行し、さらには支流の巨瀬川との合流点でもあったことから度々洪水の被害を受けていた場所である。

調査地の周辺には自然堤防が発達し、その自然堤防上には本遺跡を包括する善導寺遺跡の他、多くの遺跡が所在することが知られているものの、発掘調査に至った例は少なく、詳細は不明な点が多い。

縄文時代については、本遺跡の約1.0km西方にあり過去5回の調査が行われた木塚遺跡において、遺構は未検出であるものの、前期の溝式・曾根式土器、晩期の土器や黒曜石土器などの石器類が多数出土した。

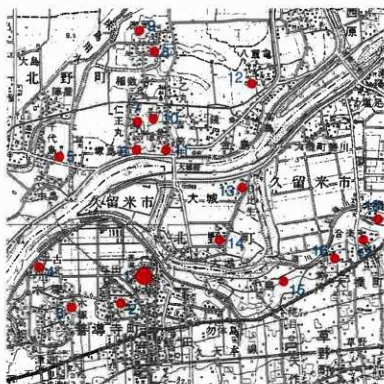
弥生時代の遺跡は、木塚古墳の下層で前期板付Ⅱ式の小甕が副葬された土壌墓2基や木棺墓2基、石棺墓6基が検出された。その他、本遺跡の北東約1.8kmの日比生遺跡は、現在福岡県立九州歴史資料館が保管する銅矛の出土地と伝承されている。また、本遺跡より約2.0km北東にある筑後川右岸の自然堤防上では、前期の墓地や中～後期の集落遺跡の金鳥今寺遺跡、中期の集落・墓地が調査され朝鮮系無文土器が出土した仁王丸遺跡、中期の集落と支石墓1基が検出された塚島遺跡、中期の68基の甕棺墓や20基の石棺墓、4基の祭祀土坑が調査され、植物珪酸体分析によって水田の存在も推定された大城中筒井遺跡がある。

古墳は南方約3kmの耳納山地北麓に多数分布するが、自然堤防上には少ない。木塚古墳は初期横穴石室を持ち、5世紀後半と考えられる古墳である。同台地上に本村1～4号墳、堂前古墳が存在したが、木塚古墳以外は現在消滅した。筑後川右岸には後期の複室構造の横穴式石室を持つ塚島古墳1基が知られているが、仁王丸遺跡にも塚があったと伝えられている。生活遺跡としては本遺跡の東方約2kmに所在する格屋敷遺跡で、溝1条、土坑1基が検出された。

奈良・平安時代の状況については不明な点が多い。但し、周辺には山本郡条里の痕跡が明瞭に認められ、また耳納山地北麓には千光寺や永勝寺など、この頃に創建されたと伝えられる寺社が多く所在する。

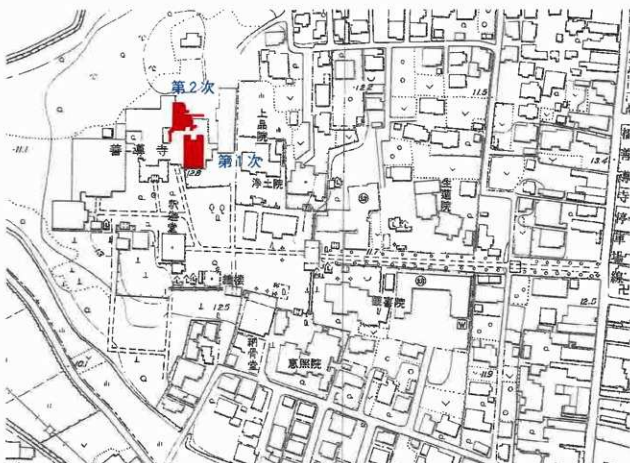
鎌倉時代になると、平安時代末期に肥前国高木から土着したと伝わる草野氏の一族、草野永平が平家討伐の行賞によって筑後国在国司・押領使両職を勤め、以後筑後の有力な国人として繁栄していた。草野氏は寺社の保護を積極的に行い、その勢力圏には大伽藍を有した寺社も多かったが、戦国末期の争乱や草野氏の滅亡によって衰微し、近世以降は農村、また日田街道沿いの在郷町・門前町となっている。

浄土宗大本山善導寺は、草野永平が大増越となり、浄土宗開祖法然上人の後継者として浄土宗2世を勤めた弁長（鎮西上人・聖光上人）を招いて、承元2年（1208）に開創したと伝わる古刹である。約800年の長い歴史の中では、南北朝期や戦国期などには伽藍を失うなどの盛衰を繰り返しながらも、今日まで広大な寺地と多数の歴史的建造物が維持されている。現在残る最も古い建造物は慶安4年（1651）建造の大門であるが、本堂・大庫裏・釜屋・広間・書院・役寮及び対面所は延享5年（1748）の寺内の大部分が焼失した火災の後、寛延2年（1749）から明和元年（1764）の15年間をかけて再建された。この建造物群は約250年前の寺院建築を伝えることから、国指定重要文化財に指定されている。寺内には建造物の他にも、仏像や絵巻物、弁長の手植え伝承を持ち樹齢800年とされる大楠や菩提樹などの美術工芸品や天然記念物があり、市内で最も多く国・県・市指定文化財物件を所有している。



1. 善導寺境内遺跡
2. 与田遺跡
3. 木塚遺跡
4. 古北遺跡
5. 千代島遺跡
6. 塚島遺跡
7. 仁王丸遺跡
8. 赤司城跡
9. 良積遺跡
10. 金島今寺遺跡
11. 大城中筒井遺跡
12. 中木戸遺跡
13. 日比生遺跡
14. 土居遺跡
15. 格屋敷遺跡
16. 常持遺跡
17. 合楽遺跡
18. 人橋内畑遺跡

第1図 善導寺境内遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25000)



第2図 善導寺境内遺跡調査地点位置図 (1/2500)

Ⅲ. 第1次調査

1. 調査の方法と経過

第1次調査は、大庫裏の地下遺構の調査である。大庫裏は桁行8間(15.848m)、梁間6間(12.000m)、平面積190.988㎡の規模を持つ南北棟建物である。

ここでは中央部に9m×40cmの東西トレンチを設定して行った試掘調査の結果、現地表より20cm下に前身人庫裏が焼失した延享4年(1747)の火災層と推定される焼土層が検出されたことから、平成17年6月13日より発掘調査を開始した。

この時点で大庫裏建物解体後、文化財建造物保存技術協会(以下文建協と略記する)による基礎工法調査がなされ、礎石も北西側の一部を残して取り外されていた。

調査は南端部より重機を使用して表土除去作業を開始したが、焼土層は検出されず、約20cm掘り下げた時点で明確に土層の色調が変化したこと、その面から調査を行うこととした。表土剥ぎは15日まで行い、翌16日からは遺構の検出作業を開始した。20日からは遺構の掘り下げを開始。22日には北東部においてカマドを検出し掘り下げたところ前身大庫裏にはその内部にカマドが設けられていたことが判

明した。7月1日からは上層遺構の実測図作成作業を開始し15日に終了。6日には文化庁豊城浩行調査官が現地を視察され、指導を得た。26日より北側下層を掘り下げたところ、北東部カマドのすぐ西側でさらに古い時期のカマドを検出。カマドは南東部でも集中して検出され、さらに中央部では方形の土坑を検出した。この遺構は検出位置や内部に白い灰のみが充填された遺構であることから地鎖遺構と考えられ、慎重に掘り下げを行った。5日には井戸を検出し、掘り下げを開始した。26日には調査成果を広く公開するために現地説明会を開催、90名の市民が来訪された。その後は下層遺構の掘り下げと実測作業を進めた。最後に下層西部で検出された大規模な土坑の掘り下げ、実測を終了し、第1次調査が終了したのは10月17日である。

遺構実測は、上・中層遺構は今回の保存修理用に設定された建物群全体番付の南北「二」、東西「ち」の番付線を利用し、大庫裏南東隅礎石の中心点を基準点として1/20の遺構配置図を作成した。なお、番付線は座標北よりも1°東偏している。その他に適宜1/10の個別実測図を作成した。下層遺構はトータルステーションを用いて実測し、遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を使用して編集作業を行っている。

写真記録は6×7サイズのモノクローム、及びカラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。



第3図 解体前の大庫裏(南東から、文建協撮影)



第4図 中・下層調査風景(南から)

2. 検出遺構

a) 上層検出遺構

カマド

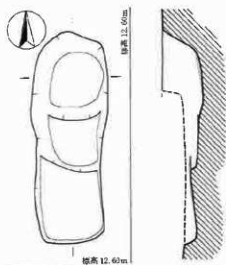
SX1 (第6・9図) 調査区北東部で検出。遺構検出時に黄色砂質土の周囲を囲むように焼土や炭化物が検出され、それを掘り下げたところ、カマドと判明した。一辺約3mの方形を呈する範囲を西半部は不明瞭ながら階段状に地山を掘り残しながら約30~80cm掘り下げ、東半部は底面よりも一段高くして南北2室の燃焼室が造られている。燃焼室は粘土が塗り込められ、上部は石組が使用される。石組は南焚口の北側基底部にのみ凝灰岩の切

石を用い、その他は割石や自然石が用いられている。燃焼室の規模は、北側が幅・奥行き共に約80cm、深さは30~40cm。南側が幅80~90cm、奥行き約110cm、深さ45~60cmを測る。燃焼室内部は2室共に白色の灰が充満し、壁面は著しく赤色化していた。焚口の前面底部も底面より約20cm掘り込まれ、その部分には灰が充満していた。SX2・28よりも後出し、SD7よりも先行する。

SX3 調査区南東部で検出。ここでは他に3基のカマドが重複し、北側を検出出来なかったが、長軸2m前後、幅約70cmと推定される。深さは約10cm。SX4・5・6よりも後出する。



第6図 SX1 全景 (北から)

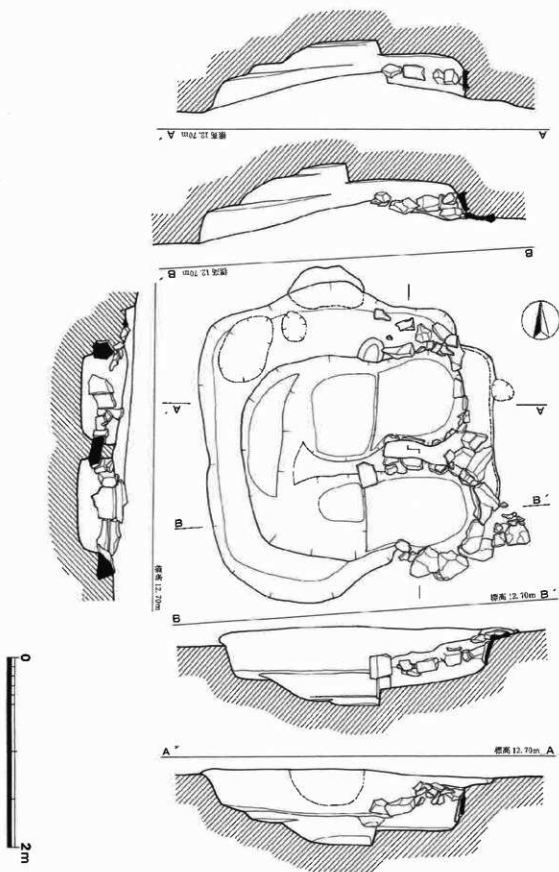


第7図 SX4 実測図 (1/40)



第8図 SX4 (南から)

SX4 (第7・8図) SX3の西側で検出。南北長2.4m、東西幅70~90cmを測る。深さは約25~50cmで、底面は南側から北側へ向かって深く階段状に掘られ、北側を燃焼室とするが、石組はない。燃焼室は幅85cm、奥行き約90cm、深さは50cm。燃焼室内は被熱して赤色化し、壁面が硬化している。その内部には白色の灰と炭化物、焼土が充満していた。



第9図 SX1実測図(1/40)

溝

SD 7 調査区北西部で検出した。一辺が30～50cm前後の片岩を並べた石組の東西溝を約2.5m分検出した。溝幅は40cm前後、深さ20～30cmで、底面は西側から東側へ向かって深くなっており、建物の内部から外部への排水を目的とした溝と想定される。S X 1よりも後出する。

SD 8 (第10図) 調査区北西部で検出した南北溝。調査区の中でこの付近にのみ厚さ3cm程の焼土・炭化物からなる層が認められるが、この溝はその下から長さ1.8m分を検出した。幅約20cm、深さ約10cm、溝の縁には玉縁口縁を持つ丸瓦を並べて補強している。

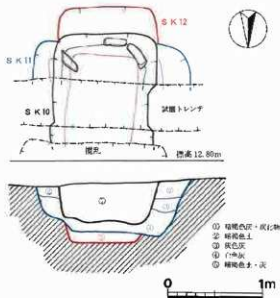
SD 9 (第10図) SD 8から分岐し、西側調査区外へ延びる東西溝。約4.6m分を検出した。幅は20～30cm、深さは10～20cmで西側へ向かって低くなっている。この溝はSD 8との分岐点から3.8mまではSD 8と同様に溝の縁に丸瓦が並べられるが、それよりも西側の大庫裏の外側となる部分は壁面と底面に平瓦を貼り付けて補強されており、排水溝と考えられる溝である。



第10図 SD 8・9 (西から)



第11図 S K 10～12検出状況 (北東から)



第12図 S K 10～12実測図 (1/40)

土坑

S K 10 (第11・12図) 調査区中央部で重複する3時期の土坑を検出。北側は試掘調査トレンチや明治45年の改修時に埋設されたコンクリート基礎によって失われている。S K 10は平面形が長方形と考えられる最も新しい土坑で、東西幅1.1mを測り、南北長は1.4m分を検出した。深さは40cmで、底面は平坦。内部には淡黄色の灰が充填されており、底面には固化した粘土の塊が3点検出された。その他には陶器の細片1点、上鉢器の小皿細片8点、鉄釘33点、寛永通宝(古)2点などが出土。

S K 11 (第11・12図) S K 10よりも先行し、S K 12よりも後出する土坑。東西1.65m。南北は40cm分が



第13図 SK 10~12完掘状況（北東から）



第14図 SK 13（東から）

検出されているが、試掘トレンチより北側では検出されていないことから、最大でも90cm以下と考えられ、東西方向を主軸とした長方形の土坑と推定される。深さは50cmで底面は平坦。遺物は土師器や鉄釘など32点の細片資料が出土。

SK 12（第11・12図） 3基の土坑中最も古い土坑で、東西1.0m、南北は1.4cm分が残る。埋土は白色の灰中に褐色土が多量含まれ、深さは60cmを測り、底面は平坦である。遺物は土師器と白磁が5点出土。

SK 13 SK 10~12の北側で検出。長軸1.8m、短軸1.5m、深さは20cm。現大庫裏に明治45年の改修時まで存在した大黒柱の柱穴よりも後出することから、近代の土坑と考えられる。



第15図 SX 16瓦出土状況（西から）

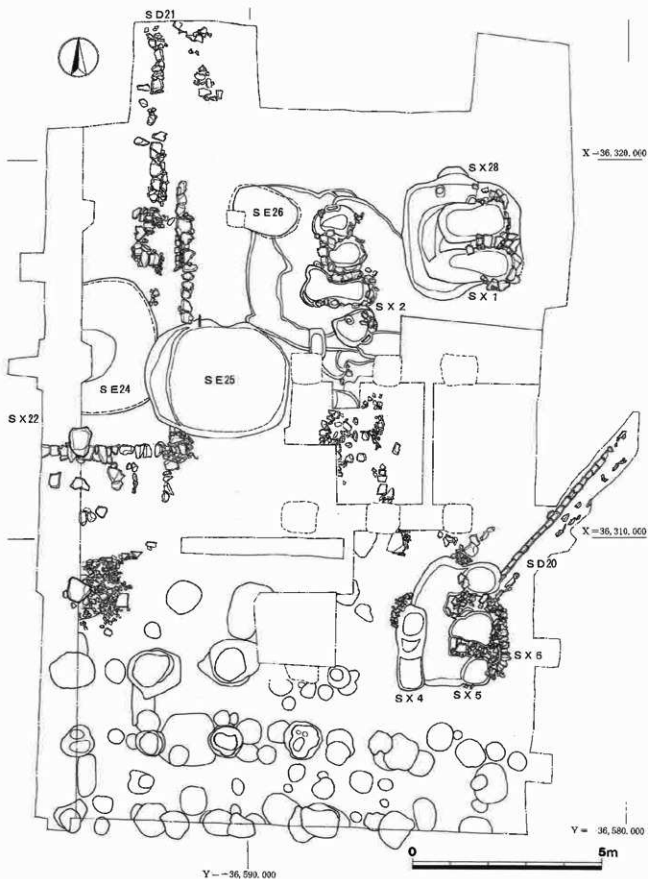


第16図 SX 19遺物出土状況（南東から）

不明遺構

SX 16（第15図） 調査区西部中央で検出。現大庫裏礎石とその下層にあるSX 22石垣との間で検出。東西2.5~5.5m、南北5.5mの範囲にわたって深さ10cm前後の浅い掘り込みがあり、大量の破碎された玉縁丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・塼が出土した。

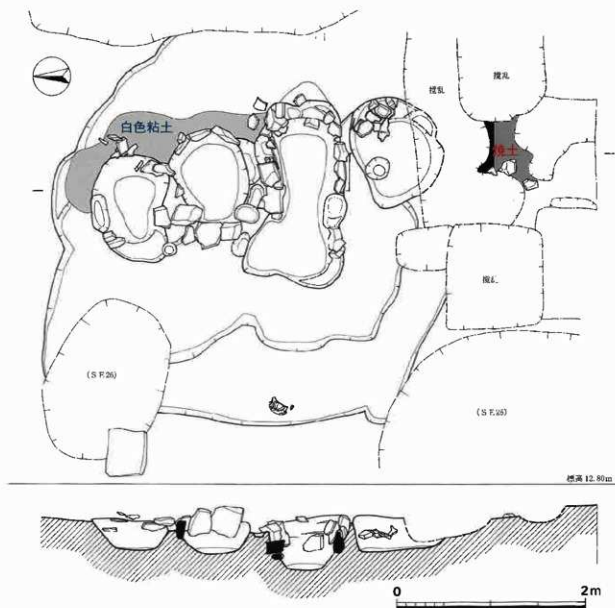
SX 19（第16図） 調査区北西拡張部付近、江戸時代後期~明治期には大庫裏よりも外側の北縁床付近が存在した場所で検出した。明確な掘り込みは検出できていないが、大量の瓦や19世紀代の陶磁器類が出土し、明治45年改修時の床縁増設時までに廃棄されたと推定される。



第17図 普濟寺境内遺跡第1次調査中層遺構配置図 (1/100)

b) 中層検出遺構

上層検出遺構を掘り下げた後に検出した遺構や、明らかに大庫裏が現状の南北棟大型建物となる以前の遺構と判断されるものを中層遺構とした。



第18図 SX2実測図 (1/40)

カマド

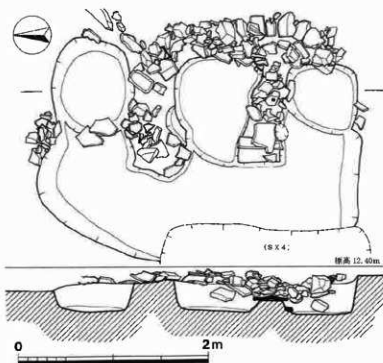
SX2 (第18・19図) SX1の西側で検出。SX1、SE25・26、SD7よりも先行するカマドである。東西4.2m、南北5.2mの範囲を20～40cm掘り下げ、その東側には白色や黄褐色の粘土と部分的に石組を用いて造られたカマドである。焚口は西側に開口し、幅70cm前後、奥行90～150cmを測る燃焼室を5基並べているが、南端の燃焼室は後出する溝や明治45年改修時のコンクリート基礎に掘り込まれ、床面の一部が残存するのみ。燃焼室の底面は焚口付近よりも20cm前後掘り下げられ、その床面と壁面はいずれも赤色化する。赤色化は北側から2・3室目の燃焼室が特に顕著であったが、北から4室目の燃焼室のみは赤色化が少なく、内部には灰とともに20～30cm大の石塔破片や瓦が多量含まれていた。他の燃焼室内部も多量の



第19図 SX 2・SE 26 (北西から)



第20図 SX 5 他南カマド群 (西から)



第21図 SX 5 実測図 (1/40)

底面付近には灰や炭化物が多量含まれていたが、特に北室にはその他に瓦や石が多量含まれていた。また、燃焼室壁面は北・南室が顕著に赤色化していたものの、中央室は奥壁上部が僅かに赤色化したのみであった。遺物は少ないが、石組中からは裏面に「文」と記された寛永通宝（1668年初鑄）、北燃焼室焚口付近からは墨弾き技法で染付けされた磁器小皿が出土しており、17世紀の後半代から18世紀前半代の遺構と推定される。

SX 6（第22・23図） 調査区南東部で検出されたカマド群の中で最も古いカマドである。SX 5の中央燃焼室と南燃焼室の間の石組を除去した後に検出された。地山を直径45cm、深さ約40cmの円形に掘り込み、奥壁と考えられる東側上部にのみ石材を2段小口積みした石組が残る。このカマドは埋土中や底面直上に灰が僅かに認められた他、壁面南側に一部赤色化した部分が認められるのみであることから、短期間のみ使用されたものと推定される。17世紀末頃～18世紀前半頃の京焼風陶器や青磁が出土している。

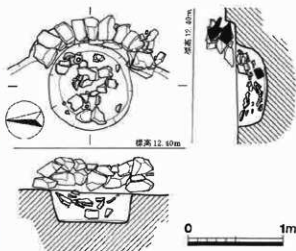
灰で埋められている。

遺物は17世紀後半代～18世紀前半代頃と見られる磁器や土師器が少量出土したのみである。

SX 5（第20・21図） 調査区南東部で検出。南側上部をSX 3、西側をSX 4によって削られているが、東西2.4m、南北3.4mの範囲を約50cm掘り込み、東半部は底面をさらに10cm掘り込み、西側を焚口とした幅80cm前後、奥行1.2m前後の燃焼室を3室分造り付けている。このカマドも燃焼室は主に粘土で造られ、中央燃焼室奥壁と他の燃焼室との壁部分には石材や瓦を小口積みした石組が見られる。燃焼室内の埋土は黄色砂質土や褐色土、黒色土で、

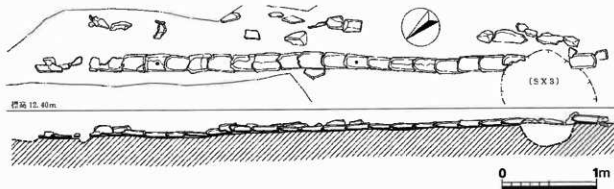


第22図 SX6 (西から)



第23図 SX6 実測図 (1/40)

SX28 (第23図) 調査区北東部、SX1の北側で検出。SX1が検出するためその大部分が失われており、燃焼室1室分の奥壁部分が幅80cm分、奥行40cm分、深さ40cm分が残存するのみ。燃焼室の壁面は著しく被熱して赤色化し、埋土も褐色の焼土が充満していた。遺物は瓦細片が2点出土したのみである。



第24図 SX28実測図 (1/40)



第25図 SX20 (南西から)

溝

SX20 (第24・25図) 調査区南東部にのみ見られる上層検出面から約15cmの厚さがある堅く締った黄色砂質土を除去したところ、SX5北燃焼室と中央燃焼室の間の袖部から北東側へ向かって延びる玉縁丸瓦の凹面を上にして連結した遺構を検出。丸瓦は22枚、約6m分が残存し、北西端部は攪乱により失われていたが、さらに北東側へ延びていたと考えられる。この遺構は北東側へ傾斜が付けられ、また、南西側延長線上のSX4南西部壁面に土師器の大型甕の破片があったことから、この甕を溜升として水を北西側へ排出していたと推定される。

この瓦列の南側には約20cmの間隔を置いて瓦列に沿った状態で長さ30cm程の片岩が一部並んでいたが、両者の関係は明確にできなかった。S X 4・5よりも先行する遺構である。



第26図 S D 21 (南から)



第27図 S X 22検出状況 (東から)

S D 21 (第26図) 調査区西部中央から北側調査区外へ延びる南北溝を約11m分検出。幅は30～70cm。両壁面には約30cmの片岩を並べているが、南部は平瓦を重ねて東壁の内側沿いに並べ、北部では西壁沿いに凸面を上にした玉縁丸瓦を連結して並べ、溝幅を30cmに狭くしていた。深さは約30cm、底面は素掘りで、底面のレベルは北側へ向かって傾斜する。S D 8・9、S E 24・25よりも先行する。

石垣

S X 22 (第27図) S X 16の瓦群を除去した後に検出された遺構。S D 21南端部から西へ折れて西側調査区外へ連なる3.4m分の石垣を検出。石垣の北側には一部に雨落ちと考えられる平瓦を立て並べた部分が残り、大庫裏が現状の規模となる以前の基壇石垣であることが想定される。



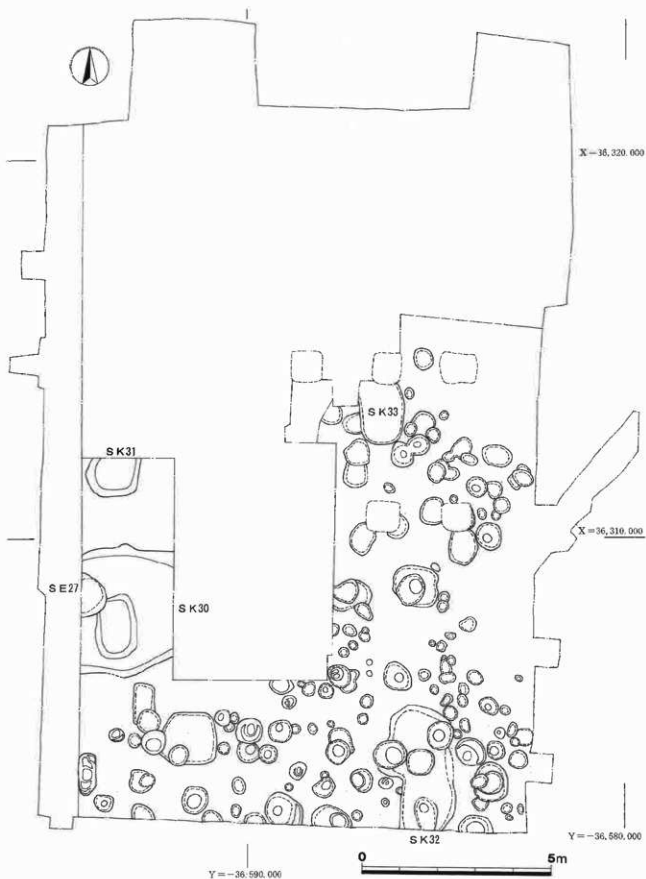
第28図 S E 25 (西から)

井戸

S E 25 (第28図) S X 2とS D 21南部を切り込む井戸。東西3.2m、南北2.8mの掘方規模を持ち、平面形は楕円形を呈する。掘り下げは1.5mに止めた。18世紀前半代頃の陶磁器などが出土した。

S E 24 S D 21よりも後出し、S E 25よりも先行する遺構。遺構の半分は調査区外にあるが、平面形は一辺3.5mの方形掘方の内部に直径1.2m前後の井戸本体が造られた井戸と推定される。井戸枠は検出されていない。17世紀後半代の陶磁器が出土した。掘り下げは1.9m分に止めている。

S E 26 (第19図) S X 2の北西部を切り込む井戸。東西1.8m、南北1.2m、平面形は楕円形を呈する素掘りの井戸である。この井戸は本来円形に掘られていたと考えられるが、壁面が崩落して広がったと見られる。断面がフラスコ状を呈し崩落の危険があることから、掘り下げは60cmに止めている。遺物は少量の陶器片が出土したのみである。

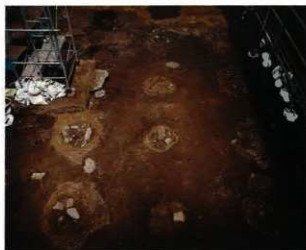


第29図 善導寺境内遺跡第1次調査下層遺構配置図 (1/100)

建物

S B 14 (第30図) 調査区南部で検出した礎石建物。梁間3間(6.1m)、遺構は西側調査区外へ延びており、桁行は4間(8.1m)分が検出された東西棟建物である。柱穴は直径70～130cmを測る円形、もしくは楕円形で、礎石は残存せず、小礫や細かく破碎された瓦を詰めた根石が検出された。柱穴の深さは20cm。S X 4よりも先行する。

S B 15 (第30図) S B 14よりも先行する東西棟の総柱礎石建物。この建物も西側調査区外へ延びており、梁間2間(4.1m)、桁行は4間(8.1m)分が検出された。柱穴は直径50～120cmの円形で、礎石は失われている。ほぼ同位置、同規模で2回の建替えが認められる。



第30図 S B 14・15 (西から)

c) 下層検出遺構

井戸

S E 27 (第31図) 調査区南西部で検出。遺構の西半分は調査区外にあるが、直径約1.1mを測る円形の素掘りの井戸と考えられる。掘り下げは1.8mに止めた。

土坑

S K 30 (第31図) S E 27よりも先行する土坑。その大半は調査区外にあるが、南北3.3m、東西は2.5m分を検出。深さは80cm。底面は平坦であるが、中央部の南北1.6m、東西1.1mの範囲がさらに30cm深く掘られている。北壁側にのみ直径30～50cmの主に片岩が多量投げ込まれていた。

S K 31 S K 30の北側で検出。遺構は北側調査区外へ延びているが、南北1.0m分、東西1.7m分を検出。深さは1.4mを測る。

S K 32 調査区南東部で検出。南側調査区外へ延びているが南北3.2m分を検出、東西幅は1.3mを測る。埋土は黒色土で、掘り下げは約20cmに止めた。

S K 33 調査区中央部で検出。遺構は北側調査区外へ延び、南北1.6m分を検出。東西幅は1.2m。この土坑も掘り下げは20cm分に止めている。

柱穴群

調査区南部から南東部にかけて、多数の掘立柱建物の柱穴と見られるピットを多数検出した。柱穴と見られるピットは直径80cm前後で、平面形は円形を呈するものが多い。その中には中世の輸入陶磁器や11世紀代と考えられる土師器などが出土し、善導寺創建期やそれ以前の建物と推定される。



第31図 S E 27、S K 30 (東から)

d) 出土遺物

近世～近代陶磁器、瓦類、土師器、土師質土器、輸入陶磁器、銅製品、石製品などパンコンテナー21箱分に及ぶ遺物が出土した。その大半は18世紀～19世紀代の国産陶磁器と瓦類である。

e) 小結

第1次調査が実施された大庫裏について『善導寺日録』などの文献を参照すると、古い順に

①寛永2年(1625) 建立の大庫裏(梁間6間×桁行9間)

②天和元年(1681) 再建大庫裏(梁間6間×桁行8間)、 → 延享5年(1748) 3月焼失

③寛延2年(1749) に再建された現在の梁間6間×桁行8間の大庫裏

①期建物から②期建物へ建て替えられた理由は不明であるが、以上のように、現在の大庫裏は桁行に若干の変更があるものの、ほぼ同じ位置で2度建て替えられた南北棟建物である。この3時期の建物の礎石や柱穴は文建協による調査が行われているため、それらの遺構については本書の報告では扱っていない。

今回の上～中層の調査では、③期のカマドは北隣に釜屋が設けられて大庫裏外へ移動していることや、遺構の検出状況、それぞれ17世紀後半代～18世紀前半代の遺物が出土する点から、北側カマド群のSX1・2、南側カマド群SX3～6、井戸SE24～27が①期もしくは②期大庫裏に伴う遺構と判断される。

大庫裏の東半部でカマド、西半部から井戸が集中して発見されたことは、詳しい記録が残されていない①・②期大庫裏内部の状況が窺われる注目すべき成果である。

ここで各遺構の新旧関係をそれぞれ古い順に整理すれば、

北側カマド群	SX2→SX1、 SX28→SX1
南側カマド群	SX6→SX5→SX4→SX3
井戸群	SE24→SE25 SE27

となる。また清SD8・9もSE25に先行する遺構である。現段階ではまだ各遺構間の併行関係は明確にし得ていない。

次に、梁間3間×桁行4間以上の東西棟建物SB14と、それに先行する梁間2間×桁行4間以上の東西棟総柱建物SB15については、先行するSB15から少量ながらも1590年代～1610年代に生産された胎土日積み段階の肥前系陶器が出土し、江戸時代初期の遺構と考えられることから、江戸初期から寛永2年までの間に存続した建物と考えられる。

この時期の善導寺は、天正15年(1587)の友家重臣の立花道雪の焼き討ちによる衰退から、関ヶ原合戦後に筑後国の新国主となった田中氏の保護を受け、ようやく寺勢を回復しつつある時期である。また、この2棟の建物に伴うものとしては、石垣SX22やそれと一連の遺構と考えられる石組南北清SD21、丸瓦を並べた清SD20が考えられ、寛永期以前の寺内の景観は全く違っていただと想定される。

下屋ではさらに古い時期の柱穴や土坑の遺構群を検出した。柱穴群からは中世の輸入陶磁器や11世紀代の土師器が出土し、鎌倉時代の善導寺創建期やその前身となる遺構群と考えられる。なお、仁治2年(1241)の『筑後国検校交替実録帳』には、善導寺の堂舎として「瓦葺金堂一字」と「□講堂一字」の存在が記されており、国が管理すべき寺とされていることを指摘しておきたい。

Ⅳ. 第2次調査

a) 調査の方法と経過

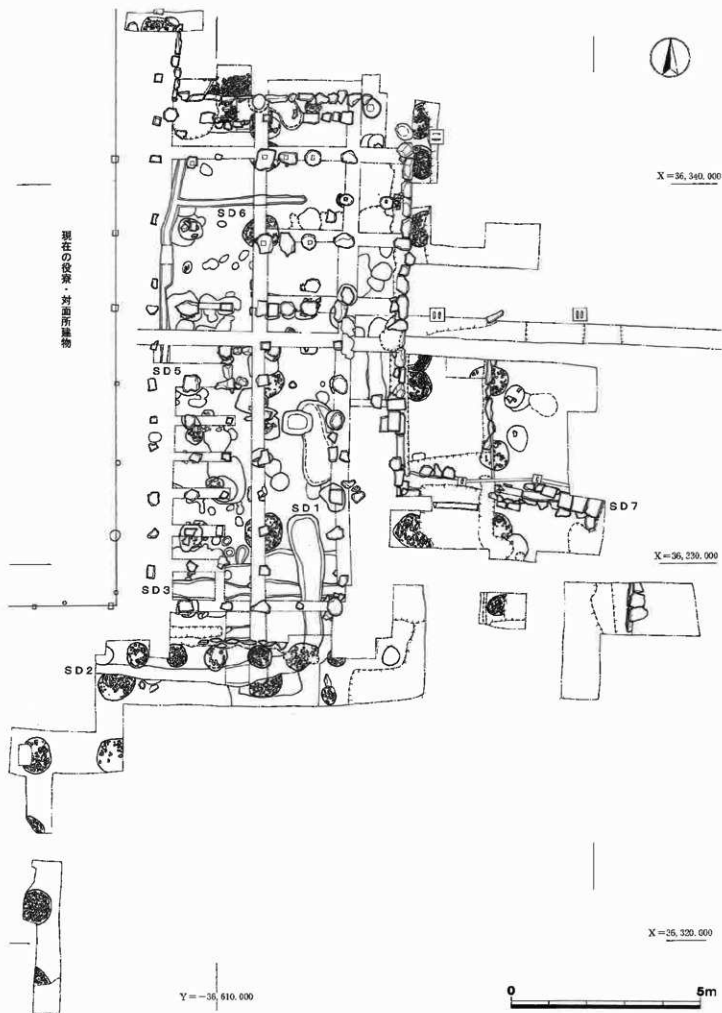
第2次調査は第1次調査地の北西隣接地で行った調査である。ここにはかつて明和元年(1746)年の再建後、明治5年に北野町専称寺庫裏として売却された役寮及び対面所東面張出部があり、その跡に中蔵が移築されていた。今回の保存修理事業では専称寺庫裏の発見により、中蔵と専称寺建物を安政改築後～明治5年までの位置に再建し、景観を復元するための情報収集を目的とした基礎工法調査を行った。

調査は平成18年1月17日より開始し、まずは、先日解体された中蔵建物の基礎部分を清掃し、土間を精査する作業を開始した。その状況を実測した後、中央部に南北トレンチを設定して掘り下げたところ、中蔵土間よりも約5cm下で、土間及び礎石抜き取り後の円礫根石のみが残る柱穴を検出した。その土間を手がかりとして全面を掘り広げ、寛延再建時や安政改築時の柱穴の遺存・配置状況を確認し、文建協の協力を得て善導寺に残された文献や絵図と対比する作業を進めた。その後さらに調査区を南側へ拡張し、明治5年以前に中蔵が所在した役寮・対面所復旧位置の南側や、所化部屋・帳場寮の柱穴を検出する作業、大庫裏や釜屋との位置関係の確認作業を進めた。1月31日には文化庁豊城浩行調査官の視察を受け、調査法などの指導を得た。現地調査は実測作業を終了した同年2月23日に終了した。

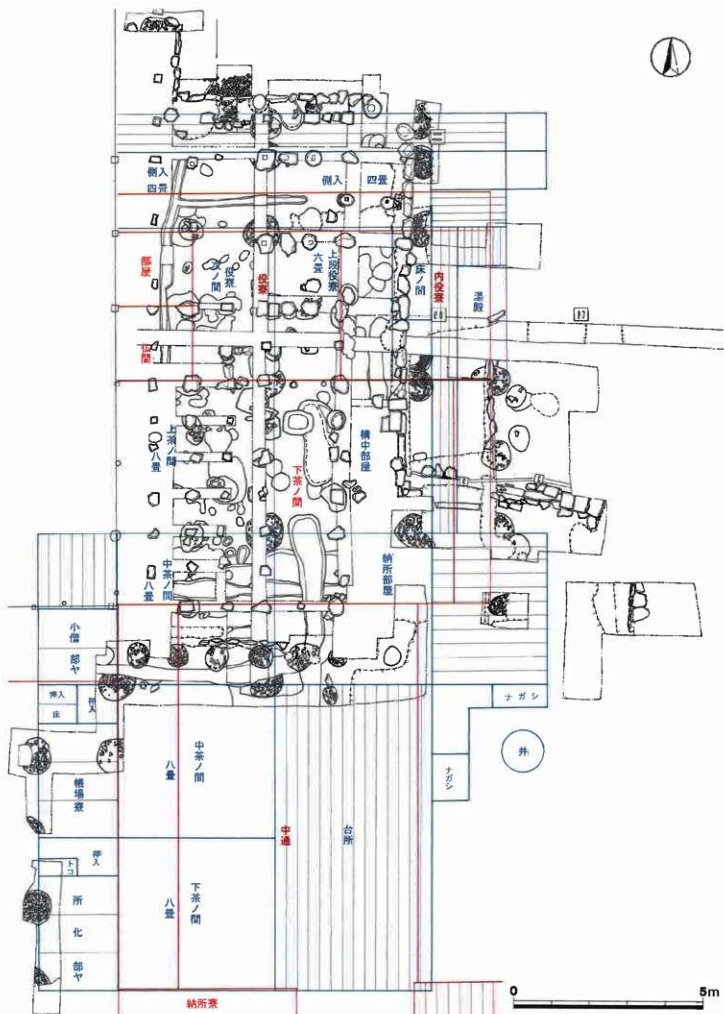
遺構の記録は、中蔵の東端部礎石の南北中軸線を基準として方眼を設定、1/20の遺構配置図を作成。さらにトータルステーションで測量し、遺構実測汎用システム「カタタ3DC」を用いて編集したデジタルデータで補足した。写真記録は6×7版のモノクロ、同カラーリバーサル写真を撮影した。



第32図 第2次調査全景(南東から)



第33図 第2次調査遺構配置図 (1/100)



第34図 検出遺構と寛延再建時（赤線）・安政改築時（青線）の復元間取り図（文建協作成図面と合成）

b) 検出遺構

建物（第34図）

中蔵の礎石を除去した後、直径70～100cmの円形を呈する礎石建物の柱穴群を検出。延享火災の後、寛延期に再建された建物や安政期に増築・改変を受けた後、明治5年に売却された役寮・対面所建物の礎石、及び、位置関係確認のため中蔵旧建立地や所化部屋・帳場寮の柱穴群と考えられるものである。礎石は安政期の床ノ間部分以外は抜き取られて残らず、直径3～10cmの円礫を詰めた根石部分のみが残存する。



第35図 解体前の中蔵（南東から）

溝

SD1・2 調査区南東部で検出。遺構は約4m南側へ延びた後、西へ折れた5.5m分が検出されたが、遺構はさらに西側調査区外へ延びている。幅40～80cm、深さは20～30cm前後。この遺構の北端部の底部からは、東西方向に延びる平瓦を立て並べた雨落ち遺構の一部が検出され、再建時以前の建物の存在が判明した。

SD3 SD1・2よりも先行する東西溝。幅40～60cm、深さは30cm。底面レベルは東側へ傾斜する。明治30年製一銭銅貨が出土。

SD5・6 調査区北西部で5.5m分を検出した南北溝（SD5）と、それに合流する3.4m分を検出した東西溝（SD6）。幅は両溝共に20cm前後、深さ約5cmを測る。埋土は締りのない灰色土で、近代以降の溝と考えられる。

SD7 調査区南東部で検出した東西溝。中蔵南西部に床に漆喰を張った流し状の遺構があり、そこから西側へ排水する為の溝である。床は漆喰張りで石組の壁を造り、さらに切石を載せて蓋をしている。明治から現代の遺構と考えられる。

c) 出土遺物

国産陶磁器、瓦類、銅製品、銭貨、鉄製品など、江戸時代後期～大正時代の遺物がバンコンテナ1箱分出土した。その中で最も多く出土したものは銭貨である。江戸時代の寛永通宝の他、文久永宝2枚、さらには明治十年代～大正十四年製の一銭銅貨が多数あるが、銅貨は主に中蔵床下掘り下げを行う以前の清掃時に出土している。

d) 小結

今回の調査に際し、文建協より天保8年（1837）「御法事之図御丈内席図」の建物略図や明治5年「善導寺日鑑」に記された略図、さらに建造物に残る痕跡などの調査成果を基に作成した図面の提供を受けた。

今回の調査ではこの図面を基にした確認作業を主として行った結果、現在の中蔵礎石の下に土間を検出し、その面で安政期建物や寛延期建物の柱穴と考えられる柱穴群を検出した。第34図は文建協が作成した復元図と遺構検出状況を合成して作成したもので、特に安政改築後から明治5年まで存続した役寮・対面所については、北野町専修寺へ移築された後、ほぼそのままの状態で現存していた建物の状況と合致する点が多く、その移築復元に資する貴重な情報が得られている。

報告書抄録

ふりがな	ぜんどうじけいだいいせき だい1・2じちようさがいようほうこくしよ							
書 名	善導寺境内遺跡 第1・2次調査概要報告書							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第246集							
編 集 者 名	水原 道範							
編 集 機 関	久留米市 文化観光部 文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL. 0942-30-9225 FAX. 0942-30-9718 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2007 (平成19) 年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	コード 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
久留米市 善導寺町 飯田 第1次調査	久留米市 善導寺町 飯田	40203		33° 19′ 49″	130° 36′ 16″	2005.6.13 ～ 2005.10.17	267㎡	文化財寺院 建造物保存 修理
第2次調査						2006.1.17 ～ 2006.2.23		
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
善導寺境内遺跡 第1次調査	寺院	平安～ 明治	建物7棟以上 カマド 7基 井戸 4基 溝 5条 土坑 7基		陶磁器 瓦 土師器 銅製品 銭貨		国指定重要文化財建造 物善導寺大庫裏地下遺 構の調査。	
第2次調査		江戸～ 大正	礎石建物 6棟 溝 5条				旧役寮及び対面所の基 礎工法調査。	
土木工事の届出		(第1次)平成17年6月20日 (第2次)平成18年1月20日			遺物の発見届け日		(第1次)平成17年10月18日 (第2次)平成18年2月25日	
調査成果の要約 (第1次調査) 善導寺大庫裏地下遺構を調査。現大庫裏以前の大庫裏に伴うカマドや井戸を検出。近世～現代に及ぶカマドの変遷が窺える成果が得られた。また鎌倉時代初期の善導寺創建期やさらに古い平安時代後期にまで遡る掘立柱建物の柱穴群も検出された。 (第2次調査) 明治時代初期に末寺へ売却された旧役寮・対面所建物を移築再建するための基礎工法調査。その建物の他、安政期、明治期の建物の変遷が窺える柱穴や石垣を検出。絵図などの文献史料を補完する成果が得られた。								

善導寺境内遺跡

第1・2次調査概要報告書

久留米市文化財調査報告書 第246集

平成19年3月20日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

編集 久留米市文化観光部 文化財保護課

印刷 N. T パック